

## トンブクトゥにおける写本の救出活動

伊 東 未 来

### 1 はじめに

マリ共和国北部の都市トンブクトゥには、トンブクトゥ写本（トンブクトゥ手稿）と呼ばれるアラビア語写本が保管されてきた。トンブクトゥ写本は13世紀から20世紀初頭に書かれた数十万点にのぼるとされる<sup>1)</sup>写本の総称である。

13～17世紀は現在のマリの大部分を版図とするガーナ、マリ、ソンガイなどの諸王国が繁栄した時代で、トンブクトゥはサハラ以南アフリカにおけるイスラームの中心地のひとつであったため、とりわけこの時期に制作・収集されたトンブクトゥ写本には、文学・医学・法学・数学など当時の高度なイスラーム学問の記録が残されている。写本図書館に収蔵されているものの中には、1211年にスペインのカルタヘナに生まれた詩人・文学者のハズィム・アル＝カルタジャーニ（Hāzīm ibn Muhammad Qartājannī）の詩編や、モロッコのアル＝ジャズーリ教団の創始者ムハンマド・アル＝ジャズーリ（Muhammad al-Jazuli）によって書かれた著作の写本など、数多くの歴史的に重要な史料が含まれる（Dijan 2012）。

2013年1月28日、トンブクトゥの図書館に収蔵されていた写本が、この街を占拠したテロリストによって焼き払われたとの情報が、BBCなどのヨーロッパの報道機関から発信された<sup>2)</sup>。当時現地にいたトンブクトゥ市長すら、首都バマコに退避していた市民からこのニュースを知らされ確認に奔走しなければ

---

1) トンブクトゥ写本の数は数十万点にのぼるとされるが、国立の写本図書館や規模の大きな私設図書館に収蔵されているもののほかに、民家で代々継承されているものも含まれるため、その正確な点数は明らかになっていない。

ならなかったほど混乱した状況であった (Molins-Llitas 2020)。その後トンブクトゥが解放され状況が安定すると、被害にあったのはごく一部の写本であることが明らかになった。その他の多くは、図書館の職員や市民らの手によって秘密裡に首都バマコに移送されており無事だったのである。市民がテロリズムやヴァンダリズムから文化財を守った行為は、ジャーナリストによる著作 (Hammer 2016, English 2017) やドキュメンタリー映像にもまとめられ、世界中のメディアで紹介された。

これらのノンフィクションは、写本移送の経緯を詳細に記した重要な記録である一方で、「失われた黄金の歴史」(Hammer 2016) が描かれた写本の移送に携わった人物たちを、テロリストにも屈しない砂漠の辺境に暮らす民として描いている。このエキゾチックかつヒロイックな表象で抜け落ちているのは、彼らが命を危険に晒してまで写本を守ろうとした動機である。本論では、先行研究や当時の新聞記事、2007年にトンブクトゥでおこなった写本図書館の調査および2014年に首都バマコでおこなった写本図書館関係者へのインタビュー調査をもとに、トンブクトゥの住民にとって写本がいかなる意味をもつのかを考察する。

## 2 トンブクトゥの歴史と写本図書館

トンブクトゥ写本はどのように制作され保管されているのかを示すため、まずトンブクトゥの歴史を概観し、今日のトンブクトゥの写本図書館について詳述する。

---

2) BBC 2013年1月30日 “Mali conflict: Timbuktu manuscripts destroyed” <https://www.bbc.com/news/world-africa-21257200>, RFI “Islamists burn priceless manuscripts as French-led troops surround Timbuktu”, <https://www.rfi.fr/en/africa/20130128-islamists-burn-priceless-manuscripts-french-led-troops-surround-timbuktu> (いずれも 2021年5月11日最終アクセス)

## 2-1 砂漠の街トンブクトゥの歴史

トンブクトゥはマリ北部の都市である。マリは西アフリカの内陸国で、人口はおよそ1966万人（2019年推計）、国民の約9割がムスリムである。面積は約124万 km<sup>2</sup>で、10の県<sup>3)</sup>から構成されている。北部約3分の1がサハラ砂漠に覆われているため、人口の大部分は中部～南部の5県および首都バマコ特別区に集中している。

本稿で取り上げるトンブクトゥは、北部県のひとつトンブクトゥ県の県都である。ソングイ、トゥアレグなどの民族集団からなる人口約5万4000の小都市で、ほとんど雨が降らない砂漠およびサヘル地帯に位置している。一方、南部に位置する首都バマコは約270万の人口を擁し、主に南部に多いマンデ系諸民族の人びとが暮らす。湿度・温度ともに高い熱帯サバンナ地帯にあるバマコでは、年間1000mm 近くの雨が降る。これらの異なる気候帯が帯状に連なる土地に言語・生業の異なる民族集団が暮らしてきたが、人びとは西アフリカ内陸部を「へ」の字に貫くアフリカ第三の大河ニジェール川を介して交わってきた（地図1）。

トンブクトゥは中世以降、西アフリカの外部世界とりわけヨーロッパにおいてもその名を知られる都市であった（e.g. Fernandes 1938: 85-87, Pereica 1892: 50-53）。英語では今日でも、トンブクトゥは実在する地名としてだけでなく「果てしなく遠いところ」を意味する名詞としても用いられる。“As far as Timbuktu” という表現は、「遠すぎて想像もつかない」、*“From here to Timbuktu”* は、「ここから地の果てまで」といった意味を表す慣用句である。2012年3月にトンブクトゥを含むマリ北部でトゥアレグによる独立運動が激化した。これを報じるニュースを見て、トンブクトゥが果てしなく遠い場所を表す想像上の地ではなく、実在する都市の名前であると知り驚いた英語圏の人びとすらいたという<sup>4)</sup>。

---

3) 本稿で主に論じる2012年～2014年当時県の数は南部・中部県のカイ、クリコロ、バマコ特別区、シカツ、セゲー、モプチ、北部県のトンブクトゥ、キダル、ガオの計8つであったが、2016年にタウデニ（旧トンブクトゥ県の一部）とメナカ（旧ガオ県の一部）が設定され10となった。



地図1 マリの地図

トンブクトゥはもともと、サハラ砂漠を遊牧する集団トゥアレグの野営地であった。トンブクトゥ（公用語のフランス語で Tombouctou, 英語では Timbuktu）という地名もその起源を明示しており、トゥアレグの言語タマシェクで「ブクトゥ（という女性）の井戸（タマシェク語で tim）」を表す。砂漠で暮らす人びとが水を求めて一時的に滞在する地に過ぎなかったトンブクトゥが、サハラ砂漠を超えて名を知られるほどの都市に発展したのは、8世紀頃と言われている。トンブクトゥは、豊富な金の産出を基盤として西アフリカ内陸部に展開したガーナ王国、マリ王国、ソングアイ王国などの諸王国の発展とともに規模を拡大させた。トンブクトゥの周辺は、そのすぐ南までニジェール川が流れ、北にはサハラ砂漠が広がるいわば水路・陸路の交差点であり、サハラ砂漠の北側のマグレブ諸国や地中海世界・中東諸国と、南側の熱帯アフリカを繋ぐサハラ交易<sup>5)</sup>の中継地として最適であった（Es Sa'di<sup>6)</sup> 1981）。

4) BBC News 2012年4月2日の記事 “Who, What, Why: Why do we know Timbuktu?”  
(<http://www.bbc.co.uk/news/magazine-17583772>, 2021年5月5日最終アクセス)

トンプクトゥは、12世紀頃には、*bilad al-Sūdān*（ビラード・アッ＝スーダーン、アラビア語で「黒人たちの地」を意味し、イスラーム世界の地政学的認識にもとづいたサハラ以南アフリカの一帯を指す）で最も栄えた都市であると称された（Hunwick 1999）。1324年には、マリ王国の王カンクー・ムサがメッカ巡礼の帰途にスペインのアンダルシアで学者を招き、トンプクトゥに現存する大モスク（ジンガレイ・ベル）を建設させた。トンプクトゥでもう一つの重要なモスクであるサンコレ・モスクも、14世紀に交易で財を成したトゥアレグ女性の寄付によって建てられ、イスラーム学者たちが集う教育の中心となった。現在トンプクトゥ写本と総称される写本の多くは、こうした繁栄期にトンプクトゥで制作されたり、トンプクトゥに持ち込まれたりしたものである。

交易と学問で繁栄を極めたトンプクトゥであったが、16世紀には金交易の要所を奪取したいモロッコによる侵略を受ける。ヨーロッパ諸国の西アフリカ進出により、ヨーロッパとアフリカを繋ぐ交易路は陸路から海路にシフトしたためサハラ交易も衰退し、トンプクトゥは徐々に縮小していった。

---

5) トランス・サハラ交易はその交易品から塩金交易とも呼ばれる。トンプクトゥの北側から西アフリカ内陸部にもたらされる主な交易品は、地中海世界から運ばれてくる織物や金属製品、サハラ砂漠の中にある塩鉱から掘り出される岩塩であった。これらの交易品はトンプクトゥ近郊のニジュール川の港でラクダからカヌーに積み替えられ、川を遡って西アフリカ内陸部に運ばれていった。一方、西アフリカのサバナ地帯や熱帯地帯の金鉱で採掘された金はその逆のルートを取り、ニジュール川－トンプクトゥ－サハラ砂漠－地中海を経由してヨーロッパ諸国にもたらされた。マリ王国の最盛期にあたる14世紀頃、西アフリカは旧世界の金の3分の1をまかなっていたと言われる。その大半はトンプクトゥを経由して輸出され、フィレンツェやジェノヴァなどで金貨に鑄造された（坂井 2015：144）。

6) エス＝サーディ（Abderrahman ben Abdallah ben Imran ben 'Amir Es Sa'di）は1594年頃にトンプクトゥに生まれ、西アフリカ内陸部の諸都市（トンプクトゥ、ジェンネ、マーシナ）で公証人として勤め、1655年頃にスーダーン（後述）の歴史を記した歴史書 *Tarikh es Sudan* を著した（Bovill 1958）。この本の写本は、1853年にイギリス政府の命を受けトンプクトゥを訪れたドイツ人探検家ハインリヒ・バルトによって発見された。

## 2-2 トンブクトゥの写本図書館

現在、トンブクトゥには公立・私立合わせて56の写本図書館がある。この中でもっとも規模が大きく唯一の国立施設でもあるアフマド・バーバ・イスラーム高等研究院 (Institut des Hautes Etudes et de Recherches Islamiques Ahmed Baba, 通称 Centre Ahmed Baba<sup>7)</sup> 写真1) は、1973年に設立された。センター設立の構想は、開設7年前の1967年、ユネスコが『アフリカ史』編纂に向けてトンブクトゥで開催した会議において、マリ政府が発案した。国立ではあるがマリ政府の予算が限られていたため、設立資金は主にクウェートからの援助でまかなわれた。2001年におこなわれた建物の新設も、マリと南アフリカの二国間協定により実現した。

一方の私立図書館は、一族で管理している小規模なものから、写本の修復設備や専任の職員・研究者も擁するフォント・カティ図書館 (Bibliothèque Fondo Kati)、アル＝ワンガーリー写本図書館 (Bibliothèque des Manuscrits al-Wangarial) などの規模の大きな施設まで、その規模は多様である。

もっとも規模が大きい私立写本図書館は、マンマ・ハイダラ写本図書館 (Bibliothèque de manuscrits Mamma Haïdara 写真2) である。上述の Centre Ahmed Baba の元館長アブデル・カデル・ハイダラが、自身の一族が16世紀から収集・保管していた写本を維持管理するため、1997年に設立した。ニューヨークに拠点を置くアンドリュー・メロン財団から開設の支援を受けるなど、Centre Ahmed Baba 同様に、国際社会からの支援・協力が設立・運営に重要な役割を果たしている。5節で詳述するが、写本図書館設立以来の各国政府や諸外国の財団との密接な関係から得られた資金援助は、今回の写本移送とその後の保管にも活用された。

---

7) トンブクトゥの住民や研究院の職員はこの図書館を、開設当時の名称 Centre de Documentation et de Recherches Ahmed Baba から今も Centre Ahmed Baba と呼ぶため、本稿でも以下では Centre Ahmed Baba と表記する。



写真1 Centre Ahmed Baba で修復作業に用いる紙を仕分ける職員 (2007年撮影)



写真2 マンマ・ハイダラ写本図書館の入口 (2007年撮影)

### 3 「読める」歴史 — アラビア語写本に対する住民の矜持

#### 3-1 南の無文字・口頭伝承と北のアラビア語写本

人口5万4000あまりの小さな街に56の写本図書館が存在することからもうかがえるように、トンブクトゥの住民の写本に対する理解と矜持は高い。

トンブクトゥで話される主要な言語のひとつに *koyra chiini* (コイラチーニ、「都市語」の意) がある。トゥアレグとアラブ系と並びトンブクトゥを構成する主要な民族であるソンガイのびとが話す言語であり、トンブクトゥでは民族を超えた共通語言語として機能している。コイラチーニで歴史を意味するターリキ (*tariki*) は、アラビア語で時代、年代記、歴史書を意味する *tarikh* を語源にもつ。歴史書が歴史そのものと同語彙で表されるほど、街の歴史は歴史書=アラビア語写本と密接に結びついている。

マリで話される言語の大部分は文字をもたない。マリの過半数を占めるマン



デ系諸民族の社会は、文字ではなく高度に発達した口頭伝承で歴史を継承してきた。これを専有的に担う職能集団 *jeli*（フランス語でグリオ *griot*）は、公用語が文字をもつ言語のフランス語になり、諸民族言語のアルファベット化が進んだ今日でも、社会において重要な役割を果たしている。一方、トンブクトゥに暮らすトゥアレグやソンガイは、口頭伝承に特化した職能集団をもたない。文字史料に自分たちの過去が記されていること、それが現在も街に保管され自分たちで読むことができることは、トンブクトゥの人びとの間で自分たちを他—とりわけトンブクトゥでは少数であるがマリ全体では主流を占めるマンデ系諸民族の文化—とを差異化させる、重要な要素でもある。

また、トンブクトゥの人びとのアラビア語の識字に対する矜持も、南部に比べて強い。マリ全体において、公用語であるフランス語の識字率は15歳以上で35.5%、15～24歳に限っても50.1%（いずれも2018年）<sup>8)</sup>と低いが、クルアーン（コーラン）学校での学習を通じて基礎的なアラビア語の読み書きができる者も多い<sup>9)</sup>。歴史的に北アフリカのアラビア語圏諸社会と密接な関係を築いてきたトンブクトゥでは、その傾向は顕著である。

2007年にトンブクトゥを訪れた際、複数の商店の帳簿で手書きのアラビア語が用いられていることに気づき、ある女性店員にその点を指摘した。彼女は、メモ帳に商品の値段などを記録しながら商店街をうろついていた筆者を、商売先の開拓に来た中国の商人だと勘違いしており、落ち着いた口調でこう助言してくれた。「あなたも覚えた方がいいですよ。アラビア語が書けないで、どうやってここで商売するんですか?」。工業製品や加工食品をナイジェリアや

---

8) UNESCOの国別データのマリの項目より。<http://uis.unesco.org/en/country/ml>（2021年7月10日最終アクセス）

9) マリのアラビア語の識字率は調査されていないため不明である。2013年のマリ教育省の発表によると、国内のクルアーン学校は3658校、教師は4652人、生徒はおよそ11万人である。もっとも多くクルアーン学校に通う学齢の子ども（5～14歳）の人口が2013年当時で約220万人なので、単純計算するとマリの子供の20人に1人がクルアーン学校に通っていることになる。普通学校の入学率が低かった1990年代までは、普通学校に通わずクルアーン学校のみに通う子どもも多かったため、この割合はより高かったと推測される。





写真3 トンブクトゥの図書館に展示されている写本制作に用いる道具 (2007年撮影)

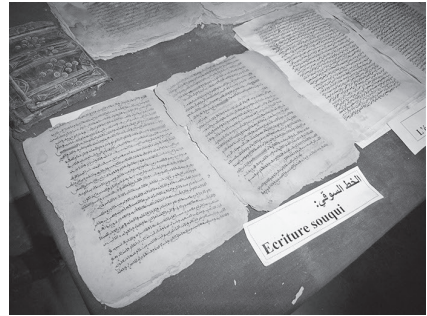


写真4 アラビア語の書き文字の種類を説明している展示 (2007年撮影)

ガーナから仕入れることの多いマリ南部の商店とは異なり、トンブクトゥの商店にはパッケージにアラビア語が表記されたアルジェリア製の製品も多くみられる。また、店舗の看板のフランス語とアラビア語での併記も、南部に比べて一般的である。

同じく2007年にトンブクトゥで出席した知人の結婚式では、新郎新婦（ともにトンブクトゥ出身のソンガイ）が宣誓書にアラビア語で署名していた。その際に公証人をつとめていた市役所職員にアラビア語での署名は一般的なのか尋ねたところ、「トンブクトゥではフランス語よりもアラビア語で署名する人の方がはるかに多い。私たちにとって、これが私たちの文字だから」という返答であった。フランス語で教育を受け、普段は主にソンガイ語を話し、アラブ系の出自でもないソンガイの人びとにとっても、アラビア語は日常的に用いる「自分たちの文字」と認識されている。

実際には、トンブクトゥ写本は様々なアラビア語の方言やアジャミ文字（この地域の諸言語話者が読めるように工夫された独自のアラビア文字などの表記法）で書かれているため、古典アラビア語で書かれたクルアーンの読み書きができるからと言って、写本を問題なく読めるわけではない。また、写本図書館の関係者や写本を所有する一族、クルアーン学校の教師以外で、日常的にアラ

ビア語写本を読んでいる住民はほとんどいない。しかし、トンブクトゥの人びとにとって重要なのは、写本が「読める」（無文字ではない、口頭伝承に依らない）歴史を体現しているということなのである。

筆者が2014年2月にトンブクトゥから首都バマコに避難してきた人びとの集いに参加した際、トンブクトゥで著名なクルアーン学校を主宰する一族の男性が語った言葉は、トンブクトゥの人びとにとっての写本の位置づけを端的に表していた。彼は、植民地期以降ヨーロッパに流出したマリの仮面や彫像（主にマリ中部から南部にかけて居住するドゴンやマンデ系の諸民族のもの）とトンブクトゥ写本を比較し、このように述べている。

〔儀礼に用いられるマリのマンデ系民族バマナンの象徴的仮面である〕ントモ (*n'tomo*) がケ・ブランリー〔美術館〕に置かれていると自慢する者がいる。それが何だ。それは彼ら〔フランス人〕が奪ったということしか意味しない。それはマリ人の誰かが金で売ったということしか意味しない。トンブクトゥの本は、トンブクトゥにあった。ずっと昔から今も、私たちは守り、私たちは読んできた。それこそが重要だ。

トンブクトゥ出身の出席者たちは一様に、この言葉に大きくうなずいていた。筆者からこの話を聞いたマンマ・ハイダラ図書館館長アブデル・カデル・ハイダラの表現によれば、こうしたトンブクトゥ市民の自負は「少し大げさ」である。彼は数十年にわたるトンブクトゥ周辺の家へへの写本寄贈や保存するための買い取りの打診を通じて、実際には、トンブクトゥ写本が収奪や売買を免れているわけではないことを知っている。その規模は不明であるが、植民地期から独立後に植民地行政官や国内外の古美術商の手によって国外流出した写本も数多く存在する。しかし、トンブクトゥの人びとにとって重要なのは、写本が「手元」（トンブクトゥの街）にあり、いつでも「読める」（無文字ではない、アクセス可能である）ということ、換言するならば、トンブクトゥにおける写本のマテリアリティなのである。

2013年、その写本が危機にさらされる出来事が起きた。次節にその危機の背景をまとめる。

#### 4 トングクトゥにおける混乱と危機

2012年から2013年にかけて、トングクトゥの街とその写本が危機にさらされた。この混乱は、2012年4月にトングクトゥがトゥアレグの反政府勢力「アザワド解放民族運動（National Movement for the Liberation of Azawad, MNLA）」に掌握されたことに端を発する。

トゥアレグはトングクトゥやその近郊にも定住しているが、歴史的にはサハラ砂漠からサヘルにかけての広大な一帯で交易や牧畜に従事してきた。19世紀には、ヨーロッパ諸国によるアフリカ分割によってその居住域が複数の植民地に分断された。現在もトゥアレグは、ニジェール、マリ、アルジェリア、ブルキナファソなど複数の国家にまたがって居住している。人口に占める割合は数パーセント（マリ、ブルキナファソ）から1割（ニジェール）程度と、いずれの国でもマイノリティである。トゥアレグは、母系制度や細分化された身分階層など、各国で社会的・政治的に主要な民族とは大きく異なる社会制度をもっている（Lecocq 2005）。加えて中央政府による定住化政策の推進や、彼らの家畜に深刻な被害を与えた旱魃も影響し、これまでも断続的に武力をともなう独立運動を展開してきた<sup>10)</sup>。

2000年代にはいり、トゥアレグの独立勢力は武装解除し各国中央政府と和平協定を結んだものの、2011年10月にリビアのカダフィが殺害され長期の軍事政権が崩壊すると状況が変化した。難民としてリビアに暮らしリビア外国人部隊

---

10) 1962～64年に起きた第1次トゥアレグ抵抗運動の際には、弾圧を逃れた多くのトゥアレグがリビアに避難した。トゥアレグの一部は、西アフリカの軍事的・宗教的統一を目指していた当時のリビア指導者カダフィが組織した外国人部隊に入隊し、軍事訓練を受けていた。リビアに逃れていたトゥアレグの一部は1988年頃からマリやニジェールに帰還したが、リビアで軍事訓練を受けていたトゥアレグが中心となり、帰還先でも独立運動が継続された。

に在籍していた独立派のトゥアレグが、政権崩壊の混乱の中で武器を携えてマリやニジェールに帰還し、武力による独立運動が再燃したのだ。

直後はマリ軍も制圧に成功していたものの、和平協定以降軍備の強化と維持管理をおこなっていたマリ軍は、2012年2月頃から徐々に独立勢力を抑え込むことができなくなってきた。このことに対して国民、特に北部に兵士を派遣している南部県の人びとの不満が高まり、3月には首都で軍事クーデターが起き、トゥレ大統領（当時）は辞任に追いやられた。この軍事クーデターによりマリ軍はさらに混乱・弱体化し、3月31日には北部ガオ県の県都ガオが武装勢力によって陥落した。

翌4月1日、トンブクトウの市庁舎や裁判所などの公共施設もMNLAによって襲撃された。MNLAは多国籍からなるテロ組織「イスラーム・マグレブのアル=カイダ（AQIM）」や「アンサル・ディーン（Ansar Dine）」と共闘していたため、マリ軍や警察だけで抑え込むことはできず、市内は混乱に陥った。MNLAはその日のうちにトンブクトウ制圧を表明し、4月6日にはマリ北部の3県（キダル、ガオ、トンブクトウ）からなる「アザワド国家」の独立を宣言した。

しかしその直後から、北部3県の独立のみを要求するMNLAと、AQIMらテロ組織の方向性が対立し始めた。トゥアレグからなるMNLAが固有の国家設立を目指したのに対し、テロ組織はマリ全土を曲解したシャリーア（イスラーム法）にもとづいて統治することを目指していた。トンブクトウ制圧から2か月後の2012年6月には、MNLAの独立運動がテロ組織になかば乗っ取られる形で支配が進行し、AQIMとアンサル・ディーンによってマリ北部のシャリーアによる統治が布告された（Tchioffo 2015）。

テロリストの支配は、トンブクトウ市民の生活を厳しく規制した。それまでもトンブクトウの成人女性の多くは自発的にヘッドスカーフを着用していたが、わずかな肌の露出もしないよう、外出時には長手袋の着用が強要された。また音楽を演奏することや歌を歌うこと、歌を聞くこと、サッカーをすることなども取り締まりの対象となった。婚外の男女関係をもった者や窃盗を犯したもの

は、公開の石打ちやむち打ちで処罰された。

2012年6月28日、ユネスコはトンブクトゥを「危機にさらされている遺産」のリストに登録した。その直後の7月から、アンサル・ディーンは市内の30以上の聖者廟を破壊しはじめた。聖者の崇拜は、アッラーが唯一の信仰対象であるという教義を逸脱する「偶像崇拜」にあたるという理由からである<sup>11)</sup>。

## 5 写本の危機と移送

トンブクトゥの図書館関係者たちは、なぜ写本も破壊行為の対象になる可能性があると考えたのか。どのように写本を移送したのか。2014年2月27日におこなったマンマ・ハイダラ図書館館長のアブデル・カデル・ハイダラへのインタビュー調査をもとに詳述する。

ハイダラが写本も破壊や略奪行為の対象となると感じたのは、テロリストがトンブクトゥを制圧した直後だった。テロ組織の「広報担当」がラジオとテレビを通じて、「誓って写本に危害は加えない」「我々は写本の価値を知っている」と主張していた。これを聞いた彼は、「わざわざ言及するということは、狙っているとしか思えない」と考えたという。写本の中には、自由な性愛を称えた詩編や音楽を賛美する書物なども含まれており、これらの内容がテロリストに「非イスラーム的」だと判断されるかもしれない。また、美術的価値の高い写本は市場で高値で取引されるため、テロリストが資金源の確保のために略奪する可能性もあったと考えた。

そこで彼は、自身が代表を務めトンブクトゥの20の図書館で構成する連盟 SAVAMA-DCI (la sauvegarde et la valorisation des manuscrits anciens pour la défense de la culture islamique) の関係者に連絡し、今後の対応を協議した。そ

---

11) 国際刑事裁判所 (International Criminal Court) はこの破壊行為を戦争犯罪とみなし、アンサル・ディーンの前メンバー、アハマド・ファキ・マハディを起訴した。2016年9月27日に被告に禁錮9年の判決が言い渡された。宗教建築や歴史的建造物に対する攻撃の刑事責任を追及する ICC 初の裁判であった。(https://www.icc-cpi.int/CourtRecords/CR2016\_07245.PDF (2021年6月11日最終アクセス))



写真5 移送時に使われた衣装ケースに入ったままの写本を見せてくれるハイダラ館長（バマコ，2014年撮影）

れと並行して，これまでの活動で知り合った国外の研究者や国際 NGO の関係者に電話で状況を説明し，今後起こりうる事態への協力を仰いだ。他の図書館関係者との数日間の話し合いの結果，図書館から運び出して市内の民家や砂漠の中に分散させることが決まった。

まず，運び出すための箱として，頑丈で万が一の浸水に耐えうる金属製のケースを使うことにし，その調達に動いた（写真5）。こうしたケースは，マリでは衣服や家財道具をしまう箱として一般的に用いられている。テロリストの占領下でも商店はこれまで通り開いていたが，テロリストによるパトロールがおこなわれていたため，一度に大量に購入すれば目をつけられる可能性がある。そこで，毎日数十人で手分けをして一人数個ずつ調達し，1か月でおおよそ2500個を入手した。箱の調達と同時に，写本の隠し先の民家を決めるため，図書館関係者の親族や知人など信頼できる人びとをリストアップし承諾をとりつけた。情報がテロリストに漏洩することを避けるため，ごく限られた人数で作



業を進めた。

4月に入り、各図書館で写本を箱に詰める作業にとりかかった。この頃にはAQIMによって夜9時以降の外出禁止令が出されており、夜間の電力もコントロールされていた。そのため作業は、動きが目立つ昼間と真っ暗になる夜を避け、「マグリブの礼拝のあたり」（日没後の薄暮時）から夜9時までの間におこなわれた。少しでも早く運び出すため、書庫での分類は無視し、緩衝材もないまま詰め込むしかなかった。数箱ずつロバ車に乗せ、協力者の民家に運び込んだ。パトロールしているテロリストの警備隊に見つかり窃盗の容疑で「逮捕」された者もいたが、その後のシャリーア法廷で何とか自分の所有物を移動させていただけであることを立証し、処罰は免れた。

8月頃になるとトンブクトゥの人びとは、支配側の戦闘員が不足していると感じるようになった。その数か月前にトゥアレグ独立勢力のMNLAとテロ組織AQIM・アンサル・ディーンが分裂したこと、トンブクトゥの人口の4割程度を占めていたトゥアレグとアラブ系の住民が、テロリストと同一視され報復されることを恐れ街から避難したことが影響していた。当時トンブクトゥはテロリストの支配下にあったものの、街の内外の往来は制限されていなかった。トンブクトゥから中部のモプチ県を通り、南部の首都バマコまで繋がる国道での検問所も、人員不足のため数が減り、荷物のチェックも手薄になっていた。そこでハイダラらは、このタイミングでバマコへの移送の作業にとりかかることを決めた。

当初は陸路での運び出しと並行して、より検閲が手薄な水路（大型カヌーに乗せてニジュール川をバマコまで航行）での輸送もおこなったが、写本が水没するリスクが高かったこと、陸路での輸送費用調達が目途が立ったことから、水路での輸送量は極力減らしたという。

何百台もの車両の手配・修理・ガソリン代にかかる費用や運転手の人件費、テロ組織の警備員に支払う「通行料」（賄賂）を、外国からの支援金でまかなった。ハイダラらはこの頃までに、オランダのクラウス王子基金、オランダ国営宝くじ財団などから約10万ドルの寄付を取り付け、バマコの銀行口座に入



金していた。連日数台ずつの車が、民家に隠していた箱や図書館から新たに運び出した箱を乗せ、およそ1000kmの悪路をバマコまで南下した。箱は衣類や干し魚入りの大袋で覆ったり、わざと乱雑に乗せたりしてカモフラージュしていたが、検閲で箱を漁られ、「テロリストの気まぐれな」通行許可が出るまで数日間の足止めを余儀なくされたこともあったという。写本はこのように段階的にトンブクトゥの主要な写本図書館から運び出され、最終的には数十万点がバマコに移された。

テロ組織によるマリ北部の掌握から約8か月後の2013年1月10日、それまで北部のみを支配していたAQIMが南部に向けて侵攻を開始した。首都バマコを含むマリ全土がテロ組織の支配下に置かれる危機を感じたマリ暫定大統領ジョクンダ・トラオレ（当時）は、フランスのオランド大統領に軍事支援を要請した。翌11日にフランス軍がマリ北部のテロ組織の拠点に対して空爆を開始し、2週間後の1月28日にトンブクトゥは解放された。

解放後、テロリストたちが逃走する際に放火した写本書図書館の様子を見て、事情を知らない国内外の人びとは、トンブクトゥの貴重な写本の多くが焼失したと考えた。しかしその時点で写本の大部分はすでにバマコに移されており、ハイダラをはじめとした図書館関係者は、今後の写本の扱いについてバマコでマリ文化省やユネスコと調整を始めていた。

## 6 おわりに

移送の様子を語るハイダラの語りは、テロ組織の一員を「ジハディスト（ジハード主義者）」と言いかけて「いや、彼らはイスラームのことを何も知らないからテロリストに過ぎない」と言い直したり、「通行料（賄賂）をはずめば彼らは静かになった」と表現するなど、テロリストに対する精神的な優位性を感じさせるものであった。

ハイダラとともに移送作業をおこなったCentre Ahmed Babaの職員アルフレッド・カランプリの語りにも、同様の余裕がみてとれた。Centre Ahmed Baba

は市内に点在する3つの建物からなり、うち一つはトンブクトゥがテロリストの支配下に入った直後から、テロ組織の拠点として利用されていた。職員の立ち入りは制限され、部屋には武器が保管され、戦闘員が寝泊まりしていた。フランス軍の空爆を受けてテロリストが撤退する際に火を放ったのも、この建物に残されていた写本である。

2014年3月3日におこなったインタビューで、カランプリは時折笑いをこらえながら以下のように述べている。

多くの写本は〔テロリストが使用していた建物の〕地下の倉庫に保管されていた。彼らは地下室の存在に気づかなかったのか？そうではない。面白いことに、〔地下室にあった〕木のテーブルが燃やされていたんだ。トンブクトゥの夜は寒い。テーブルを燃やして暖をとったのだろう。いずれにしても、大部分の写本は無事だった。そこで私は気づいた。そうか、彼らはアラビア語が読めなかったのだと。読んでも理解できないものに、興味はないのだから。もう一つ、面白いことを教えてあげよう。地下室にはビールの瓶も転がっていた。なんてことだ。彼らはアラビア語が読めず、アルコールをたしなむジハディスト。

3節で示した、南部の諸社会に対する北部トンブクトゥの人びとのアラビア語写本を通じた差異化が、写本の救出についての語りの中では、無知なテロリストよりも知的・宗教的に成熟したトンブクトゥ市民という構図をとって現れている。

写本の救出活動は、トンブクトゥの人びとにとって、「イスラーム学術都市トンブクトゥ」という表象を再強化する出来事であった。しかし、トンブクトゥはテロリストの支配から解放されたとはいえ、2021年現在も散發的なテロや外国人の誘拐が起きており、治安は回復していない。ユネスコとマリ文化省がハイダラらの協力のもと、バマコに保管されている写本の電子化プロジェクトが進められている。トンブクトゥに比べ湿度の高いバマコで写本の維持管理が困難になっているものの、写本がいつトンブクトゥに戻されるのか、用途は

立っていない。

住民にとってトンブクトゥにあることでその象徴的意義が高められていた写本は、国際機関や諸外国の文化財団の力学のなかで、今後どのように維持管理されるのか。また、コミュニティの中での価値づけはどのように変化していくのか。今後も調査を続けていきたい。

### 参考文献

- Bovill, E. W.  
1958 *The Goleen Trade of the Moors*, Oxford University Press.
- Dijian, Jean-Michel  
2012 *Les Manuscrits de Tombouctou*, JC Lattès.
- English, Charlie  
2017 *The Book Smugglers of Timbuktu*, William Collins.
- Es-Sa'di, Abderrahman ben Abdallah ben Imran ben Amir  
1981 *Tarikh es-Soudan* (traduit par O. Houdas), Adrien-Maisonneuve.
- Fernandes, Valentim  
1938 *Description de la Côte occidentale d'Afrique de Ceuta au Sénégal*, Librairie Larose.
- Hammer, Joshua  
2016 *The Bad-Ass Librarians of Timbuktu and Their Race to Save the World's Most Precious Manuscripts*, Simon & Schuster.
- Hunwick, John  
1999 *Timbuktu and the Songhay Empire : Al-Sadi's Tarikh al-Sudan Down to 1613 and Other Contemporary Documents*, Brill.
- Lecocq, Baz  
2005 "The Bellah Question : Slave Emancipation, Race, and Social Categories in Late Twentieth-Century Northern Mali", *Canadian Journal of African Studies*, 39(1) : 42-68.
- Molins Lliteras, Susana  
2000 "Iconic Archive : Timbuktu and Its Manuscripts in Public Discourse," Carolyn Hamilton and Lesley Cowling (eds.), *Babel Unbound : Rage, Reason and Rethinking Public Life*, Witwatersrand University Press.
- Pereira, Duarte Pacheco  
1967 *Esmeraldo de situ orbis* (translated and edited by George Kimble), Kraus Reprint.
- Tchioffo, Kodjo,  
2015 *Mali Conflict of 2012-2013 : A Critical Assessment*, Lambert Academic Publishing.
- 坂井信三  
2015 「トンブクトゥー 中世イスラーム文化の遺産」竹沢尚一郎編著『マリを知るための58章』昭和堂, pp.143-147.